

私の一文字「信」

医療・介護システム改革委員会(2019年度)

委員長

若林 辰雄

三菱UFJ信託銀行
特別顧問



「信」を追い続ける

会員の方が思いを込めて選んだ一字に、書家の岡西佑奈さんが命を吹き込む「私の一文字」。今月は、若林辰雄医療・介護システム改革委員会(2019年度)委員長にご登場いただきました。



岡西 若林さんが選ばれた「信」という字は、にんべんに「言」という字を組み合わせています。言の下の「口」は神様への誓いの言葉を入れる器の形を表し、そこに「人」を合わせた「信」は、神様に誓いを立てた上で人と約束をするという様子を表現しています。

若林 私はお客さまに信じて託されることを目指し、会社の存在意義もかかっているという思いで「信」という字を40数年、追い続けてきました。「信託」がどういうものか、実感として分かってきましたが、今のお話はいたく腹に落ちました。たとえ完成形まで到達しなくても、神様と約束した以上はそれを追い続けることが大事なのだとあらためて感じました。

英語では、高い「信認」に基づいて相手のために仕事をする人を“Fiduciary”(フィデューシャリー)と呼び、その人が果たすべき義務を“Fiduciary Duty”といいます。私が三菱UFJ信託銀行の社長だったときは、入社式では毎年、Fiduciaryと呼ばれる立場の人間になるようにと繰り返してきました。そのためにはまず、人としての土台を作らなければならない。そして、信頼されるに足る専門性を磨き上げなければならない。さらに、それを託してくださったお客さまに発揮できなければ意味がない。Fiduciaryを極め

ることを会社のルールにしてきました。

国内でも海外でも腹の底から信頼し合い話せる相手を見つけるのは、非常に難しい。しかし、お互いが人間として相手を信用できると体感できれば強い信頼関係を築き上げられるものです。相手にとって都合が悪いことも、逃げずに正直にぶつけ合う。私の経験からも、信頼は摩擦や意見の相違を乗り越えた上で成り立つものだと思っています。

岡西 万物の恵みに感謝されていると伺いました。

若林 毎年桜が見事な花を咲かせますが、よくよく考えると奇跡のような出来事です。私が今存在することも両親がいてそれぞれにまた両親がいて…と、限りなく奇跡に近い現象が重なった結果です。人生で辛いことや困難なことはありますが、自分も奇跡の一部を成していると思えば、ありがたいという気持ちは湧いてこそ、物事を悲観的に捉える気にはなれません。感動すると何となく元気が出てくるものです。人生をポジティブに生きられる気がします。

岡西 経済同友会の活動に対する思いもお聞かせください。

若林 私は医療・介護システム改革委員会の委員長を3年務めました。その中で非常に感銘を受けたのが、フィンランドでは国民の医療関係データを国が全て把握して高度で効率的な医療制度を確立し、国民が何の抵抗もなく個人データを提供しているとお話でした。それはまさに私たちが目指しながらなかなか進展させられなかったことです。国民と国との間に信頼関係があるからで、やはり「信」がいか



書家

岡西 佑奈

1985年3月生まれ。23歳で書家として活動を始め、国内外受賞歴多数。